「菜穂子」年立考
――作品読解のための時間的諸元――

大森郁之助

A feu M. Takehiko Fukunaga

「菜穂子」「楡の家」「ふるさとびと」年立

凡　例

一、本表は、堀辰雄の小説「菜穂子」「楡の家」及び「ふるさとびと」の主要作中事項中、年・月等を特定し得るものを、年月順に整理したものである。

一、年次の表記は、「楡の家」第一部・第二部各冒頭部分に倣い、西暦紀年を以てした。

一、掲出事項の年・月次等は、関係作品の間或いは初出稿と改訂稿との間等で変動乃至齟齬している場合があるが、それらはそのつど、後註に示した。

一、各作品本文は原則として筑摩書房版十巻（十一冊）本堀辰雄全集に拠ったが、「関連本文」欄には、当該作品名（略号　菜・楡・ふ）・章数の後に、現在最も軽便なテキストである新潮文庫版『菜穂子・楡の家』（昭43改版本）での該当ページを、算用数字を以て付記した。

年（西暦）	月・季節	事項	関連本文
一九〇九	？	都築明[註1]、両親を失う（明、七歳）。	**菜穂子**　二11
一九一一	春	牡丹屋[2]の娘おえふ、蔦屋ホテルに嫁ぐ（おえふ、十九歳）。	**ふるさとびと**　一163
一九一二	春	おえふ[3]、牡丹屋に戻って初枝を産む。	ふ　一164
	？	おえふ[4]の弟五郎、出京。	ふ　一164
一九一七	春？	三村[5]夫人、夫（菜穂子の父）に死別（菜穂子十五歳、兄の征雄十八歳）。	**楡の家第一部**　112

	夏	三村夫人、信州O村に別荘を購入。[6]	榆一	114
一九二三	春	おえふの弟五郎、帰郷。[7]	ふ	二 168
	冬	初枝、雪道で突き転ばされ、それがもとで脊髄炎を患い寝たきりになる。[8]	菜 ふ	五 24 二 167
一九二四	春	菜穂子の兄征雄、大学の医科を卒業しT病院の助手となる。[9]	榆一	116
	夏	三村夫人と菜穂子、O村の別荘に滞在中、郷村K村のホテルのティ・パアティで、かねて面識[10]のあった作家の森於菟彦に会う（この時、森[12]三十七八歳、三村夫人四十二～四歳）。／一週[13]間ほど後、森、三村別荘を訪問。森[14]と三村母娘、村内を歩き[16]、おえふに会う。／数日[15]後、菜穂子、明と共にK村に行き、ホテルに森を訪う。／数日後、在京の征雄が腸カタルを起こしたため、とりあえず菜穂子が帰京。明の悲嘆。	榆一 菜 ふ	～ 125 二 11 一 166
	秋	おえふの許にときどき東京[18]から手紙が届く。[17]	ふ	二 168
	冬	森、小説「半生」を発表。	榆一	125
一九二五	冬の終り	おえふの老父、病歿。[19]	ふ	三 170
	2	森、雑誌「昴」に恋愛詩を発表し、その切り抜きを三村夫人に送ってくる。	榆一	126
	春？	おえふの弟五郎、東京からもと小諸の芸者おしげを娶る。[20]	ふ	三 171
	6	五郎、リウマチスを患い寝たきりになる。	ふ	三 171
	8	森、O村の三村別荘を再訪。三村母娘と村内を歩く。／数日後、菜穂子、突然帰京。明の悲嘆。[21] [22]	榆一 菜 菜	131 二 12 四 19
	？	おえふと、長期滞在客の法科の学生との噂が、ひろがる。[23]	菜 ふ	五 24 三 173
	12	森の紹介で、ある雑誌の記者と良家の娘がO村に現れ、村外れにひっそりと滞在。翌年二月の末に人知れず去る。[24]		
	？	明を養育してくれた叔母、死歿。[25]	菜	四 18

一九二六	夏	森、[26]北京[27]に発つ。	榆二	137・138
		（七日[28]）三村夫人、O村の別荘で菜穂子のための手記（「榆の家」第一部）をしたためる。	ふ	三174
			榆一	110
一九二七	春	征雄[29]、台湾の大学に赴任。	榆二	137
	7	森[30]、北京で客死したことが、新聞に報じられる。／三村夫人、菜穂子一人O村へ行った留守宅で最初の軽い発作。	榆二	137・139
	8	菜穂子、三村夫人と入れ違いにO村から帰京して、おば（伯母？叔母？）から黒川圭介との縁談を持ち込まれる。	榆二	147
	9	（二十四日[31]）三村夫人、散歩に出て、彼岸の墓参帰りのおえふに会う。／手記を焼却すべきかと、迷う。	榆二	141・142
		（二十六日[32]？）菜穂子O村に戻り、縁談を承諾して来た旨を母に告げる。	榆二	154
		（二十七日[33]？）朝、三村夫人、狭心症の発作。	榆二	156
	冬	菜穂子[34]、黒川圭介と結婚（菜穂子二十五歳[35]、圭介三十五歳）。	榆二	157
			菜	三14
一九二八	9	（二十三日[36]）三村夫人、O村の別荘で手記を書き継いで（「榆の家」第二部）いる途中、再度の狭心症発作で、危篤（死殁）。	榆二	137・156・157
一九二九	春先	菜穂子[37]、O村の別荘に行き、母の手記を読み、敷地内の榆の木の下に埋める（「菜穂子の追記」成る）。	榆二	157
	3	明[38]、私立大学の建築科を卒業。建築事務所に勤める。	菜	二10
一九三〇	3	（月半ば[39]）明、暮れ方の銀座の街頭で、菜穂子夫婦とすれちがう。	菜	一8
			菜	三16
	4	（月初め）明、休暇を貰ってO村を訪れ、牡丹屋に滞在。初枝や、村の娘早苗と知る。	菜	四17・19・21

		菜	六25
	6	菜	九36
	7	菜	十三53
	9	菜	十一41・44
	11？	菜	十三52
		菜	十六62
	12	菜	十七66
		菜 菜	二十78
		菜	二十一83
		菜	二十二86

(40)（？）菜穂子、喀血する。／医者の勧めと本人の希望で、八ヶ岳の麓の療養所に入院。
（月末）圭介の母、菜穂子を見舞う。
明、O村から帰り、再び建築事務所に通う。
（上旬）圭介、菜穂子を見舞い、病室内に一泊。
（月末）明、上京して築地の病院に入院中のおえふ母娘を見舞う。
(41)おえふ母娘、医者に見放されて帰郷。明、上野駅まで見送りに行く。
(42)（上旬）明、あてもなく旅に出、途中、突然思い立って菜穂子を見舞う。
(43)（前半）明、旅中発病し、牡丹屋で看護を受ける。
(44)（後半？）菜穂子、吹雪の日に突然思い立って療養所を抜け出し、上京。

註

（1）明は「七つのとき両親を失くした」（「菜穂子」一）。創元社版『菜穂子』所収本文に拠る、以下同）というが、「彼と同じ年の菜穂子」（同）が「彼女の二十五のとき」結婚しており（「菜」三）、その「翌年の秋」に母三村夫人が急死した（同）とされる。夫人の死は「一九二八年九月二十三日」と日付けした手記「楡の家」第二部を書いている途中のことだった（「楡」二、「菜穂子の追記」）から、前年一九二七に二十五歳なら、同年の明の七歳は一九〇九年となる。

但し、今その両者の記述を併せることによって年次を算出した「菜穂子」と「楡の家」とは、ときに記述の齟齬、乃至、かなりこじつけて読まないとちぐはぐに感じられる場合があり、その最たるものとして、前引「菜穂子の追記」では「私はその（母の死の）数箇月前に既に母の意に反した結婚をして」いた、とする。これによれば結婚は九月の母の急死の数箇月前だから、三月か四月か、ともかく母が死んだその年の内で、二十五歳だったのは二八年のこととなる（いうまでもあるまいが、これらの作品が書かれた昭和十年代の日常生活での年齢の称え方は数え年が普通）。では、「菜穂子」「楡の家」どちらの設定に拠るべきか、というと、他の幾つかの要素について（他の幾つかの箇所で）は、「菜穂子」初出稿（昭16・3）を改訂して単行本初収稿（昭16・11創元社版）を成す際に「楡の家」の記述に近づける傾向が見られる。その顕著な例を挙げれば

(イ)「菜穂子」二の森於菟彦の登場し方

（初出）或夏の日の事、菜穂子の母が若い頃懇意にしてゐた、著名な作家の森於兎彦が突然彼等の前に姿を現はした。鄰村のMホテルに暫く静養に来てゐたのだつた。三村夫人はさう云ふ森於兎彦の思ひがけない訪問を受けると、

（創元社版）（略）三村夫人は偶然そのホテルで、旧知の彼に出会つて、つい長い間よもやまの話をし合つた。それから二三日し

てから、O村へのをりからの夕立を冒しての彼の訪れ、養蚕をしてゐる村への菜穂子や明を交じへての雨後の散歩、村はづれでの愉しいほど期待に充ちた分かれ――、

三村夫人と森が「若い頃懇意」というのと「旧知」とでは、「榆の家」第一部の「一面識のある」に比べれば共により深い関係にとれようが、相互の間では創元社版の方が親密感を薄めていよう。三村別荘訪問までの段取りも、創元社版は、「榆」一の「或るテイ・パアテイに招かれて」「そこのホテルに出かけ」「ひよつくり」会った後日という記述との照応を、加えている（但し「榆」では「一週間ばかり」後）。「夕立を冒して」の挿入や雨後の散歩云々の加筆も、同じ。

(ロ)「菜穂子」三の、菜穂子の結婚と三村夫人の死との時間的関係

（初）（夫人の死は、菜穂子の結婚の）翌年の冬、

（創）翌年の秋、

「翌」年とする点が「榆」と違うのは前述の通りだが、季節としては「榆」の「九月」に合致。

(ハ)「菜穂子」四の、森の再訪への菜穂子の対応

（初）夏の末、鄰村のホテルに作家の森於兎彦が又来たとかいふ噂が何処からか伝はつて来た日、突然菜穂子が誰にも知らさずに東京へ引き上げて行つてしまつた。

（創）（略）又来てゐるとかいふ噂が前からあつた森於兎彦が突然O村に訪ねて来てから数日後、急に菜穂子が（略）

「榆」一では森を迎えて菜穂子が「いかにも機嫌よささうに、しかも驚くほど巧みな話しぶりで」相手をしたり、前年と同様母娘で村外れまで森を送ったりしており、かつ、森が去った後の物思いを三村夫人に深刻に見咎められてもいるので、「菜穂子」初稿のままではどうにも繋がらない。

(ニ)同右、後年O村を訪れての明の、前件に関わる回想中の情景

（初）三村家のテラスの附いた別荘も、

（創）（略）大きな榆の木のある別荘も、

（初）夏の夕方などよく其処へ皆で集つたテラスには、

（創）（略）皆で集つた榆の木の下には、

（初）そのテラスでの最後の夏の日の事

（創）その榆の木かげでの最後の夏の日の事

（初）明はこのテラスで三村夫人からはじめてその事（菜穂子の帰京）を聞いた。

（創）明はこの木の下で三村夫人から（略）

「榆の家」第一部は、原題「物語の女」での初出稿（昭9・10）から改訂・改題した際に、新題名への拘泥を疑わせる程あちこちに、三村別荘の敷地内の榆の大樹を取入れている（小稿「『菜穂子』の涯」㈠、昭41・6『国学院雑誌』。桜楓社版『堀辰雄の世界』に収録）。この点は何も「菜穂子」まで歩調を合わせる必要はあるまいから、これは改訂時点における「榆の家」の意識され方を示唆するかと思われる。こう考えると、一般的には「榆の家」によって「菜穂子」を訂正するのが、いわば作者の本意に沿ってその遺漏を補う読み方でありそうだが、菜穂子の結婚の年月次に関してはそう機械的に決し難い事情がある。

菜穂子の結婚は、「榆の家」にとってはその主題である三村夫人の人生観に対する反逆として、一つの決着でもあり、重要には違いないが、一方、「菜穂子」に於ては出発点である。どちらがより重要か、という比較は困難だろうが、前者に於ては＜母の意に反しての＞結婚という点が重要なので、もう一つの決着である三村夫人の死との時間的間隔は、とくに、これこれでなければならないといっ

たものではあるまい（そして、結婚の時期如何は、「楡の家」ではそれ以外には波及しない）。ところが「菜穂子」の方は、「もう一人ではな」い（「菜穂子」六）ところの、「もう結婚した女」（十九）としての彼女を描くのだから、具体的にいつ結婚していればこうなり、いつならばこうという訣ではなくても、観念の上で作品世界の時間的基盤であり、一般論としても何かの折に思い合わせ照らし合わされる要件の一つであろうが、とりわけ「菜穂子」では一つの章の冒頭に置かれ、前述のように年齢を併せ示し、更にその後に

（三村菜穂子が結婚したのは、今から三年前の冬、彼女の二十五のときだつた。／）結婚した相手の男、黒川圭介は、彼女より十も年上で、高商出身の、或商事会社に勤務してゐる、世間並に出来上つた男だつた。圭介は長いこと独身で、もう十年も後家を立て通した母と二人きりで、大森の或坂の上にある、元銀行家だつた父の遺して行つた古い屋敷に地味に暮らしてゐた。その屋敷を取囲んだ数本の椎の木は、（以下略）

といった調子で（まだ続く）、真正面から、「今」と関連させ――これから展開する内容と関連づけ、かつ、卑近な日常現実の視点にも亙る道具調べ的な一段を導いてもいる。即ち、結婚の時期それ自体も菜穂子の結婚生活に対するかなり実際的な作用を予想させるように、仕向けられているのではないか。対する「楡の家」で

（略）母の死後、爺やから渡された手帳が母の最近の日記らしいのをすぐ認めたが、そのときは何かすぐそれを読んで見ようといふ気にはなれなかつた。（略）私はその数箇月前に既に母の意に反した結婚をしてしまつてゐた。その時はまだ自分の新しい道を切り拓かうとして努力してゐる最中だつたので、一たび葬つた自分の過去を再びふりかへつて見るやうな事は、私には堪へ難い事だつたからだ。

と、他の事柄の説明のため必要最小限言及されているのとは、作品世界に於て関わってゆく範囲の広さ、役割の大きさ――についての読者の予想・意識（実際の読後感とは別の問題）に、格段の差があろう。

従って、「菜穂子」の記述を訂正するのは「楡の家」の訂正とは事の大きさが違う。作品本位にいえば、――或いは、既に成立し提供されている作品に対しての主たる当事者としての読者にとっては、「楡の家」の訂正の方が、遥かに望ましい。実在人物の伝記と違って、どうせ絶対的な正誤ではないのだから。

しかし作品成立過程（「菜穂子」改訂段階）に於ける作者の本意は、ということになろうが、現行本文のくいちがいは、果たして「菜穂子」の記述を見落としたためか、それとも、「楡」の記述の見落としか。前述のように、かなり丹念に（万遍なくとはいえぬ《後述》にしろ）二作品の整合を図っている作者が、或る一つの章――それも作品全体の始めの方であり、げんにその章の中でも整合を図っている（前掲例(ロ)）第三章の、その冒頭という、見落とし難かろう位置の、「楡」のように一二の語句ではない一つのセンテンスを見落としたというのは、余り想像しやすい事ではあるまい。とにかく二作品の間でくいちがう以上どちらかの見落とし・整合し忘れを想定しなければならない訣だが、ここばかりは、こちらを動かすのは厄介（全篇にわたって年齢がずれてくる）な「菜穂子」の設定＜と異なる、「楡」の設定＞の見落とし――＜こちらの訂正なら殆ど問題のない、「楡」の訂正＞の失念――を、想定したい。

結論のみ繰返せば、菜穂子の結婚は「菜穂子」に拠って三村夫人の死の前年、即ち一九二七年でその時に菜穂子及び明が二十五歳。本題に戻って、七歳だったのは一九〇九年、とする。なお以下、こ

れが年次及び年齢算定の基礎となる。

（2）（3）　おえふを中心にO村の旅館牡丹屋の人々を描く「ふるさとびと」は、内容的には「楡の家」「菜穂子」の系列から外れるが、年立の上では時折交叉はしていて、その一つ、「菜穂子」四に、休暇を貰ってO村に静養に来た明が「おえふに今年十九になる、けれどもう七八年前から脊髄炎で床に就ききりになってゐる、初枝といふ娘のあつた事」を「はじめて知」る、という記述がある。この静養休暇は、前述菜穂子の結婚が「今から三年前」と回想されるきっかけとなった、明と菜穂子の銀座街頭でのすれちがい（「菜」一）の後まもなくだから、一九三〇年。その時に十九歳（数え年。以下すべて同じ）という初枝は一九一二年生まれで、おえふの結婚と出産の時間的関係については

（略）蔦ホテルに嫁いでいつたのは、明治の末、かの女が十九の春だつた。……／結婚して一年。――おえふは、はじめて出来た子の初枝を生みに、母親のもとに帰つてくると、そのままどうしてももうホテルに戻らうとはしなかつた。（「ふるさとびと」一）

とあるから、結婚は一九一一年。「明治の末」は、明治四十五年（一九一二）一年だけと考えなくてもよいのではないか。

但し、ついでながら、右によっておえふは一九一一年に十九歳、従って例えば一九二四年には三十二歳の筈だが、その年四十二～四歳（後註（12）参照）の三村夫人が、「楡の家」第二部では「私とは只の五つ違ひ（年下）」と言っており、それだと五～七歳繰り上がってしまう。その他にも、「菜穂子」四では「もう四十に近いのだらうに」（実際は三十八）とほぼ正しく辿っていながら、僅か八ケ月後の二十一では「この四十過ぎの女」とする。たしかに、それぞれの場面で、こういう年配だと都合がいい（？）ということはあって、例えば「楡」二では、三村夫人はおえふの不運にめげぬ「単純な何気ない様子」や、「素振りなどいかにも娘々してゐるのを」我が身にひき比べて感嘆するので、五つ違いでこそ感嘆に値いすれ、十余り年下では当り前になってしまう。「菜穂子」二十一でも明が「殆ど記憶にない母の優しい面ざし」を思い浮かべるよすがになっているので、明の母親としてもおかしくない年配（明は二十八歳）に、少しでも近づけたかったかとは察せられるが、そうしていい訣ではない。

（4）　おえふの出産の件を承けて、「（それきり《おえふは》遂にホテルへは戻らなかつた。／）弟の五郎は、それを機会に、東京に出た。」（「ふ」一）と続けられているので、時間的間隔は余りないものと見る。

（5）（6）　菜穂子が「十五のとき」で、その「年の夏、急に」三村夫人は亡夫が好きだった山が恋しくなって別荘を求めた、とある。従って死別は、春頃か。

（7）　「ふるさとびと」一の末尾三分の一辺から二冒頭にかけては、経過時間や前後関係が曖昧で、読んでいる時はとくに気にならなくても、正確に時間関係を特定しようとして常識的に記述された順に推しあててゆくと、それ以外の所で既に確定しているデータと矛盾してしまう所がある。よって、ここの記述し方を先立てず、後文から溯ってくると、

(イ)三の末尾で、或る年の二月末のこととして、森於菟彦が北京に往くことになった旨を、おえふが、森の紹介でO村に来ている男の口から耳にしている。森の北京行きは一九二六年夏のこと（後述）。

(ロ)その、森の北京行きを話していた男女は、前年（一九二五）十二月末にO村に登場。

(ハ)三は割合丹念に季節を順次明示しつつ進められており、右の十二

月末から溯ると「夏」に滞在客の学生達の間でのおえふの陰口云々、「梅雨さき」に弟の五郎のリウマチス罹患、その前に五郎の結婚、更にその前「冬の立ち去らないうち」＝年初に老父の死があって、以上が一九二五年。

㈡その前に、「その翌年。――」という書き出しで、「秋になつてから」のおえふの許への東京からの手紙の件、雪が近くなっての初枝の病状悪化、冬に入っての五郎の狩猟耽溺を描かれた一年（一九二四ということになる）がある。

㈭その又前に、「春ごろ、東京から帰つてきた」五郎の、「夏には学生たちを誘つて小諸へ酒をのみに」行き「冬は冬で、猟に夢中」の一年が描かれている。

――よって、五郎の帰郷は一九二三年。

（8）「菜穂子」四では「七八年前から」床に就ききり、とするが、五及び「ふるさとびと」二で「十二の冬」と年齢を明記しているに拠る。なお「菜」五では「誰かに突き転がされて」、「ふ」二では「誰かに突きころがせられたやうに転んで」とする。

（9）征雄が就職したため三村夫人と菜穂子「だけでその夏をO村に過しに行くやうになつた」とする、その夏に、森との出会い（次項参照、一九二四年）が起こっている。

（10）一九二八年に書かれた手記「楡の家」第二部で、O村での二た夏続いた森との交渉の二た夏めの方をさして、「私は一昨々年の夏」お会いしたきり、とする。従って最初の夏は、二八年から四年前の一九二四年。なおここは「去年」（一九二七）の森の北京での客死の回想の続きだが、その森の死から起算して最後に会ったのが何時だったかを云うなら「一昨々年」ではなくて「前々前年」「三年前」だろう。それに、死の三年前＝二四年が最後の対面だったとすると、その結果（？）の日本脱出を客死の「一年前」＝二六年とする（後註（26）参照）からその間二年で、小説的に無意味な空白ともなろう。

（11）O村で出会うまでの森と三村夫人の交渉度の、揺れについては（1）の㈠参照。なお少々逸脱ながら、この揺れは、或いは、作者がかなりそのイメージを保持しようと努めているかに思われる〈モデル〉、芥川龍之介と片山広子との、現実の相識程度の不安定とも関係していようか。現在、〈片山は大正八年頃に、既に芥川の病気を見舞ったりしている〉として、その時点での〈淡い恋〉を推断した伝記もあるが、その物証かと思われる大正八年二月二十八日付片山宛芥川書簡の

敬啓　御見舞下すつて難有う存じます（略）そちらの御病気は如何ですか（略）私の方からも御礼旁〻御見舞まで

とある後半からすれば、自身も病中の片山は芥川と同様、手紙で見舞ったものと解するのが妥当であろう。軽井沢で片山と出会った大正十三年の、八月十九日付小穴隆一宛書簡で「もう一度廿五歳になつたやうに興奮してゐる」となぞらえる大正五年は、片山の歌集『翡翠』（大5・3刊）を評して（大5・6『新思潮』掲載）同女との〝交渉〟が生じた年でもあるが、同時に、夏目漱石の激賞を得て文壇にデビューした年でもあった。とくに片山との間が〈恋〉まで行かなくともそれ以外で十分興奮していた筈の年であり、しかし殊更その年を引合いに出したのは、現前の女性（十三年の時点での芥川の対・片山感情の存在は、疑えない）との縁も思い出してか、

――という程度の勘案で、落着くのではないか。

（12）「楡の家」第一部の初稿「物語の女」では、森は三村夫人より「五つか六つ年下」の「三十五六」、改稿した「楡」では年齢差はそのままで「三十七八」とする。作品効果だけからいえば二歳程度の上げ下げは無意味にも思えるが、或いは、作者自身親炙した（堀と

芥川の関係はよく知られているが、片山に対しても）実在モデルのイメージという、効果云々を超えた所に厳存したかと思われる別の規準との兼ね合いが、作者を神経質にしたものか。因みに芥川と片山の当時の年齢は、芥川（明25生）三十三歳、片山（明11生）四十七歳。ここでは、読者に受入れられ易いほどほどの年齢差に修正しつつ、現実の片山の年齢的イメージ（芥川のそれよりも重要な。「榆」二で、一九二七年秋の時点の心境として三村夫人が菜穂子に告げる「私はね、（略）この頃になつて漸つと女ではなくなつたのよ。（略）私は自分がさういふ年になれてから、もう一度森さんにお目にかかつて心おきなくお話の相手をして、それから最後のお分かれをしたかつたのですけれど……」というのは、片山が「実際にそう」堀に言ったのだという《堀多恵子「思い出」、昭42・3明治書院刊『写真作家伝叢書7・芥川龍之介』付録・月報5》）も残すための試行錯誤、と解されようか。

(13)「榆」一では、ホテルでの出会いから「一週間ばかり立つた、或る日」。「菜穂子」二では初出時ホテルの件を欠き、創元社版で「二三日してから」。「榆」に拠ること、（1）参照。

(14)　村内の散歩の件は「榆」一・「菜」二創元社版にあり、「菜」初出時、欠。但しその折のおえふとの出会いは「ふるさとびと」一に、おえふの側から描かれているのみで、しかも「背がたかくて、疲れたやうな、痩せた男」（森）とか、三村夫人の「何か見られたくないやうに、無言で会釈をして、すうつと通り過ぎてい」く、「何か異様な」容子、とかは、最後の別れとなる翌二五年夏の方がふさわしく思える。しかし、「ふるさとびと」二の、東京からおえふの許に来る手紙というのが森からのものだとすれば（(18) 参照）、手紙の件は一九二四年秋と考えられる（(17) 参照）ので、森がおえふを知るのが二五年夏では話が合わなくなる。二五年の森の来訪は「夏の末」（「菜」四）で「すでに秋の日ざし」（「榆」一）と印象されているのに対し、「ふるさとびと」では「夏の半ばのこと」とあるのも、或いは傍証になろうか。

(15)　菜穂子と明のK村行きの件は「榆」一にのみ。「菜穂子」は創元社版もO村内の散歩まで。

(16)　菜穂子の急遽帰京の件は「榆」一にのみ。「菜穂子」にはなし（「菜穂子」四の突然の帰京は、翌夏のこと）。

(17)　年次の推定は（7）の㈡参照。

(18)　「秋になつてから」「ときどきおえふの許に東京から」届く手紙を

　おえふはよく何処かの物陰へいつて、一人でそれをよんで来ると、そのあとでしばらく淋しさうな顔つきをしてゐた。

一生寝たきりであろう初枝の死を「心の隅で」願うこともあり、「ふいと何か希望のやうなものがかすかに涌いてくる」というのだが、おえふがそれほど心を動かされる手紙の主としては、翌二五年になって漸く「をととし頃からその（夏の滞在客の）学生たちの間に（略）何かと陰口にのぼつてゐるらしい」とぼんやり示されている程度の〝相手〟では、どんなものか。夏の間しか見聞きしない学生達の陰口にのぼるのは、夏の間のO村でのおえふの周辺の人物が相応しいが、そういう人物は秋になってから手紙で意思表示する迄もなく、夏に機会はあったろう。夏にも言い、帰京してからも手紙で、ということもあり得るが、その手紙は夏の学生客には知りようがない訣だから、学生の陰口とは因果関係はなかろう。だから、陰口云々によって手紙の件を読者が何となく受け入れるとしたら、かなりいい加減な類推としてでしかないのではないか。それでは、おえふの迷いの大きさに対して、釣合いがとれまい。その反対に、前章一の末尾で日ざかりの街道からおえふを「何か意外なやうな」「こん

な山国にはこんな女もゐるのか」というような眼差しで見た森於菟彦であれば、このいわくありげな場面も生かされ、又、おえふの迷いにも値いする相手といえよう（勿論、手紙の趣旨は異性間の最も一般的な誘いとは限らない――「楡」一によれば森はまだ独身だから、そうであっても差支えはないが）。

(19)(20)　年次の推定は（7）のハ参照。

(21)　この件は「楡」一にのみ。「菜穂子」は二・四共、記さず。

(22)　この件は「菜穂子」四にのみ見え、「楡」一にはなし。森が鄰村のホテルに「又」来た二た夏めのことで、「楡」一の征雄の病気で帰った二四年の時とは明らかに別。偶然二年続けて、それぞれ別の理由で急遽一人帰京する、というところ迄は有り得る事としても、そのつど明が自分のせいではないかと考えて悲しむ（「楡」一、「菜」四）というのは、どんなものか。二つの作品がそれぞれに一方の折だけを描いて、二年繰返されたとはしていないところから見ると、或いは同一事件をどちらかの作品が年次を錯覚してずらせ、二度あったことに（現行本文では、そうなる）してしまったのかも知れない。

(23)　明の回想として「おえふがその年の春から彼女の家に勉強に来て冬になつてもまだ帰らうとしなかつた」学生と噂が立ち、「別荘の人達の話題にまで上つた事」があった、というのだが、噂が立ったのは、いつのことなのだろうか。傍点部の言い方では「冬になるまで帰らなかった（＝冬になって、やっと帰った）」や「冬になっても帰らなかった」と違って、学生の意思は示されているが、実際に冬帰った帰らないの結果は未決着、つまり、今まさにその冬である時点での＝現在進行形的な把握（噂）ともとれそうだが、しかし冬では、別荘には話題云々という程、人が居まい。そうするとやはり夏で、その後日談がないところから、それきり明もO村に来なくなったという、森のO村再訪の夏に擬した。

(24)　年次の推定は（7）のイ(ロ)参照。

(25)　一九三〇年のO村訪問の時点で「数年前」故人になったとあるが、その叔母の死によって「翌年から、明はもう（略）此の村へは来なくなつた」その「最後の夏」に、森のO村再訪があったとされるので、一九二五年の秋以降、二六年春までの間か。

(26)　二八年執筆日付の「楡」二でその北京での客死の報を「去年の七月」のこととする森を、回想して、その「一年前」に支那へ赴かれ・「この一箇年殆ど支那でばかりお暮らし」云々とする。

(27)　「楡」二では漠然と「支那へ赴かれて」とするが、「ふるさとびと」三では森からの書留郵便を披いた恋の逃避行中（？）の「或雑誌の記者」が、「森さんは北京に往かれるんだとよ」と相手の女に言っている。

(28)　「楡」一冒頭に執筆日付を記す。

(29)　森の客死を知る「その夏になる前」、とある。

(30)　(26)参照。

(31)　「お彼岸の中日」のこととする。一九二七年の中日は二十四日。

(32)　前註の「お彼岸の中日」から「二三日立つか立たないうちの事」とする。「菜穂子の追記」には「（「楡」二の）一番終りに記されてある或秋の日の小さな出来事があつてから、丁度一箇年立つて」母がその日の事を書き出し（「楡」二として）ていた折、云々、とあり、厳密にいえば「楡」二の最後の記事は三村夫人の狭心症発作（前回の）だが、これは書きかけた所で途絶えているし、娘の立場から「小さな出来事」とはいうまいから、恐らく、その前夜（深更）の、夫人と菜穂子の話し合い（その結末が、厳密には翌早暁の縁談承諾の報告）をさすと思われる。その話し合い（報告）「から、丁度一箇年」後とする夫人が筆をとった日付は第二部冒頭に「一九二八

年九月二十三日」とあるが、丁度一年前の同日とすると（31）と繋がらない。「楡」二で「それから約一年後の今夜」とするのに拠る。

（33）前項の翌朝のこととする。

（34）（1）参照。

（35）菜穂子の「二十五のとき」で圭介は「彼女より十も年上」。

（36）「楡」二冒頭の執筆日付による。

（37）「菜穂子の追記」に、「母の死後、爺やから」母の手記を渡された時から「まだ半年とは立つてゐな」い、「まだ春先き」のこと、とする。

（38）「菜穂子」一の、街頭で菜穂子夫婦とすれちがった時点（一九二七年の菜穂子の結婚を「今から三年前」とするから、一九三〇年）で、「去年の春」とする。但しついでながら、そうすると菜穂子と同年（「菜」二）だから現在二十八歳、卒業時二十七歳で、異常に遅いといえようが、そうなった事情はとくに説明されていない。これと似たこととして、同時点での回想中に、O村に森於菟彦が現れた当時（一九二四、五年）の二十二、三歳の明と菜穂子を「少年」「少女」と称んで（として描いて）いるのも、通常の感じ方とは異なろう。直接年立の問題ではないが、前述おえふの年齢感の揺れと共に、この作品（群）の技法としては検討に値いしよう。

（39）年次の推定は前項等参照。

（40）入院後若干の日数を経た七の冒頭に「五月になつた」とする。

（41）明が見舞に行った九月末が入院の直後だったかどうかは判らないが、ともかく「二月の余も病院で初枝を徹底的に診て貰つ」た挙句、とあることから概算。

（42）明の見舞を記す前の一段に「十二月になつてからは」として、季節の推移を写す。

（43）牡丹屋で寝込んだ後に、「あれほど旅の間ぢゆう明の切望してゐた雪が、十二月半過ぎの或夕方から突然降り出し（略）まだ猛烈に降り続いてゐた」（「菜」二十一）とある。

（44）前項、十二月半ば過ぎての初降雪を設定されたO村（信濃追分）と、菜穂子が入院している八ヶ岳の麓（富士見）とは、現実には同一気象にはなるまいが、ここでは後者でも明の見舞の数日余り後まで、まだ雪を見ていず（十九）、これは日数的に、菜穂子を見舞った後の明が雪を切望しつつ更に旅を続けていた、牡丹屋に入るまでの期間に、ほぼ見合いそうである。従って、その次に八ヶ岳の麓が描かれる二十二章で、冒頭、唐突に「雪は烈しく降り続いてゐた」と切り出されると、前章二十一章でO村に突然降り出した猛烈な雪に、つなげて感じてしまうのではないか。即ち、恐らく現実には反するのだろうが同一の気象（の変化）を接点として、遠隔の二地の、主人公を異にする二十・二十一章（O村、明）と十九・二十二章（八ヶ岳山麓、菜穂子）とを時間的に承接させようとしたものと解した。

（昭62・9・9稿）